

# 博 士 学 位 論 文

内 容 の 要 旨 及 び  
審 査 結 果 の 要 旨

第 7 集

平 成 29 年 3 月

大 手 前 大 学



## は し が き

本冊子は、学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 8 条による公表を目的として、平成 29 年 3 月 16 日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

学位記番号に付した「博第○号」は学位規則第 4 条第 1 項によるもの（いわゆる課程博士）であり、「論博第○号」は学位規則第 4 条第 2 項によるもの（いわゆる論文博士）である。

目次に記載の報告番号は学位規則第 12 条によるもの（文部科学省への報告番号）である。

# 目 次

学位記番号 [ 報告番号 ]	学位	氏名	論文題目	頁
博第 8 号 [ 甲第 8 号 ]	博士（学術）	<small>かわだ</small> 川田 <small>まさひろ</small> 真弘	戦前日本におけるイタリア・ファシズム の受容と伝播—下位春吉を中心に—	1

氏 名	かわ だ まさ ひろ 川 田 真 弘	
学 位 の 種 類	博士（学術）	
学 位 記 番 号	博第 8 号	
学位授与年月日	平成 29 年 3 月 16 日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当	
学位論文題目	戦前日本におけるイタリア・ファシズムの受容と伝播 —下位春吉を中心に—	
論文審査委員	（主査）大手前大学大学院教授	柏 木 隆 雄
	（副査）大手前大学大学院教授	鳥 越 皓 之
	（副査）大手前大学教授	尾 崎 耕 司

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文においては、戦前日本においてはじめてイタリア・ファシズムを紹介したとされる下位春吉の著作や彼の活動の実際を精査することを通じて、戦前の日本においてイタリア・ファシズムを指導したベニート・ムッソリーニや、イタリア・ファシズムそのものが如何に伝えられたのかを検討する。また、大正及び昭和の日本の世論がムッソリーニやファシズムをどのように捉え、そしてファシズムという新しい思想を下位春吉がどのように伝えたのかを検討する。

第一章においては、イタリア・ファシズムを語る上での前提として、第一次世界大戦から 1922 年のムッソリーニ内閣成立までの政治を中心としたイタリア史について述べる。1914 年に勃発した第一次世界大戦に対して、イタリア国内では参戦を巡って左右の枠を超えた議論が沸き起こるが、最終的にはムッソリーニを含む参戦派の示威行動によって、連合国側に立った参戦に傾く。しかし第一次世界大戦においてイタリアは多大な損害を被り、その一方で領土はほとんど獲得できなかった。大戦後のイタリア情勢は不穏なものとなり、「赤い二年間」と称される左翼の台頭期を迎える。その一方で、左派とファシストの間では暴力を伴う衝突が繰り返され、イタリア情勢はますます不穏なものとなり、最終的には左派を暴力で抑え込んだファシストが伸張。そして 1922 年、ムッソリーニは「ローマ進軍」というクーデター紛いの手法によって政権奪取する。

第二章では、同じく大正及び昭和の日本の世論を語る上での前提として、また同時代のイタリアと比較するために、第一次世界大戦から 1924 年の加藤高明護憲三派内閣成立までを述べる。日本も第一次世界大戦に参戦し、イタリアと同じように戦勝国の一員に連ねた。しかし第一次大戦後のイタリアは政情不安に陥り、そして独裁政権が誕生してしまうこととなったが、一方の日本は米騒動などを経て、本格的政党内閣である原敬内閣が誕生し、そして第二次憲政擁護

運動の結果、加藤護憲三派内閣が成立。加藤内閣以降、日本では普通選挙制度が施行され、「憲政の常道」に基づいて立憲政友会と憲政会（のち立憲民政党）が交互に政権に就く二大政党制が成立し、民主主義が花開くこととなった。民主主義が伸長しつつあった当時の日本の世論が、ムッソリーニ率いるファシスト党政権についてどのような意見を持っていたのかということもまた述べ、日本におけるイタリア・ファシズム観の変遷を見る。

第三章においては、主に下位春吉の生涯とその活動について詳述する。下位は1915年から25年までイタリアに長期滞在していたが、その間のイタリアは第一次世界大戦にはじまり、第一次大戦後の混乱、左右の衝突、そしてムッソリーニ政権樹立と、イタリア近現代史上もっとも重要な出来事が起きていた。さらに、下位は『死の勝利』などで日本でも知られていた詩人のガブリエーレ・ダンヌンツィオと交流があった。ダンヌンツィオとの友情と、ムッソリーニ政権の樹立を間近に見たことは、下位の思想面の形成に大きな影響を及ぼした。また一方で、下位は現地のイタリア人文学者や、下位と同じくイタリアに滞在していた日本人と共に、日本文化を紹介する雑誌を創刊する。下位の文学者としての足跡もイタリアに残っている。下位の活動や彼の著作及びテキストを基に、彼がどのような思想的軌跡を辿り、また彼が日本帰国後にどのような活動をしたかを見て、下位春吉の人物道を再検討していく。

第四章では、下位春吉のイタリア・ファシズムに関する所論を検討しつつ、下位と同時代の知識人であり、『資本論』の完全邦訳をはじめて成し遂げた高畠素之のイタリア・ファシズムに関する論とを比較する。高畠と比べて、下位春吉がどのようなイタリア・ファシズム感を持っていたのかが、そこで明らかになろう。戦前日本において、下位はイタリア・ファシズムに精通し、さらにはムッソリーニとも交流があるとされ、各地の講演会にひっぱりだこになるほどであった。その一方で、下位の言説に対する批判もあがった。その批判者のひとりが高畠素之であり、高畠は下位を「職業的紹介者」と揶揄し、さらにはイタリア・ファシズムを国家集権主義であり、いずれ経済的にも統制経済を実施するであろうと1928年時点で予測する。高畠の見立てに下位は批判的であり、下位はイタリア・ファシズムが国家集権主義であることは認めつつも、経済は自由主義経済であると説く。1930年代以降、イタリア・ファシズムに耳目が集まっていた日本だったが、アドルフ・ヒトラー率いるナチス・ドイツが勃興し、ナチス・ドイツは驚異的な経済復興を成し遂げ、そして第二次世界大戦序盤戦においてナチス・ドイツ軍が欧州を席卷したことで、日本の世論はナチス・ドイツに注目するようになる。そのような中、下位春吉は表舞台に出ることが徐々に少なくなり、下位は日独伊三国同盟締結を訴えはしたが、その存在の影が薄くなっていた。

最後のまとめでは、下位春吉が何故イタリア・ファシズムを信じ続けていたのかを取り上げ、その上で歴史上における下位春吉の位置付けを確認する。1943年、イタリアではムッソリーニが首相を解任され、イタリアは連合国に事実上降伏。幽閉されていたムッソリーニは、ドイツによって救出され、ドイツが樹立した傀儡政権（イタリア社会共和国、サロ政権）の首班に据えられる。それでもなお下位はムッソリーニを信奉し、イタリア・ファシズムの将来に期待していた。下位はムッソリーニと同年であり、ムッソリーニに倣い、またムッソリーニに対し

て競争心を持っていただろう。その考えがいつの間にか信奉心へと変化したと思われる。

下位春吉は、イタリア・ファシズムを思想ではなく国民精神統一のための運動と考えており、国民精神統一のための運動なのだからどのような情勢であってもファシズムに関係がないと考えていたのかもしれない。そして歴史上における下位の位置は、下位自身ファシズムを思想とっていないため、思想史上で彼の位置を見出すことは出来ないが、イタリア・ファシズムを日本で最初に伝えた人物という位置付けになるだろう。

## 審 査 結 果 の 要 旨

本論は第一次世界大戦から二次世界大戦終結前後にいたるおよそ30年間の欧州、とりわけイタリアの政治情勢やムッソリーニを首班とするファシスト政権と、当時イタリアに滞在した日本人思想家下井春吉の係わりを横軸に、その時代の日本の政界、思想界の中での下井の位置を縦軸に配して、従来日本の学会においてそれほど多く取り上げられることのなかった、ある意味できわめて特異な日本のファシスト下井春吉の生涯と履歴、その思想的足跡を辿ることを目的としたものである。本論の構成は、「はじめに」5頁 第1章「ムッソリーニ・ファッショ政権誕生までのイタリア」18頁 第2章「大正デモクラシーとイタリア・ファシズム」24頁 第3章「日本のファシスト・下井春吉—その生涯と思想—」21頁 第4章「下井春吉の「ファシズム」論と彼の歴史的意義」31頁 まとめ7頁 参考文献4頁 計A4判110頁からなる。

第1章では、第一次世界大戦勃発から始めて、オーストリアと戦線を開いたイタリアのその後の領地問題に絡む紛争から、ダヌンティオらの決起、さらにムッソリーニの擡頭を招いた政局の混乱を詳細に辿り、折からイタリアにダンテ研究に赴いた下井春吉のダヌンティオへの接近やファシスト政権への結びつきを論じる。第二章は、一章で論じたイタリアファッショ政権誕生までの時代における日本の政局について第一次世界大戦を天佑と見て、大隈内閣の施策やその後を引き継いだ原、加藤友三郎内閣の動向を述べたあとで、イタリアで勃興してきたムッソリーニを中心とするファッショ体制について、日本の世論がどのように受け取り、対応したかが、当時の新聞の記事を中心に述べられる。そして始めは半ば警戒的であった論調が、日独伊三国防共協定の締結される前後から、次第に好意的になり、そこへイタリアから帰国した下井春吉のイタリア・ファシズムのプロパガンダ的活動が始まり、彼のイタリア・ファシズムと日本での著作、講演活動の概要に触れる。第3章は、その下井春吉の人となりとその思想の形成過程が跡づけられる。また下井がイタリアに赴いてからの活動に関して詳細な調査に基づいて、イタリアにおける著作を紹介、下井の独特の行動パターンを分析する。第4章は、こうして掘り下げられた下井春吉のいわゆるファッショ思想の内容の吟味と同時代の政治経済思想における下井の位置についての考察がなされる。そして彼の著述、講演活動がナチス・ドイツが日本の社会で大きな地歩を占めるに従って、だんだんと勢いがなくなり、また彼自身がイタリア・ファシズムを鼓吹する機会も少なくなつて、戦後公職追放の処分のあと、ほとんど日本の思想界、政界で忘れ去れるに至った経緯が辿られる。最後の「まとめ」7頁は、そうした下井の思想の総括である。彼のファシズムはいかなるものか。政治的信条はどのように彼の行動の中で発揮されたのか、が現代の日本の下井研究家たちの意見を引ながら検討され、論者なりの下井のファシズムの位置づけを行っている。

### 本論の評価

下井春吉の事績や著作に関して、調べうる限りの努力を払い、その概要を明らかにし、これまで埋もれていた感のある下井の業績の意義を明らかにし、大正末年から太平洋戦争に至る日本のファシズムへの傾斜のありさまを、イタリア、日本両国の政治事情を歴史書や当時の新聞



の記事を細かく追うことによって、具体的に示した点が評価できる。

本論は、予備審査を経て論文の主旨や問題意識が明確になったこと、不備を指摘された個所について、可能な限り補綴してあること（たとえば新渡戸と下井の帰国記事の新聞の扱いの比較等）、第4章で下井の著作やファシズムについての下井の立場をより明確に示し得ていること、彼の思想的位置の評価を「まとめ」の段階で、一応総括しえていることを評価したい。外国語文献に拠る調査が貧弱な点は遺憾だが、下井の各著作を始め、新聞や手に入る限りの書籍を詳細に検討して、埋もれていた感のある下井の著作に一応の概括をしている点も博士論文として評価すべきだろう。

ただ、この論文の肝心要の点である下井春吉のファシズムの本質についての議論が、やはり中途半端に終わっている印象が残るのを遺憾とする。またイタリア・ファシズムについての歴史学的、社会学的メソッドからのアプローチが不十分で、先行論文や資料の読解に、熟さないところが見られることは、本論文の大きな欠点である。第一次大戦後の日本の政治の分析も、必ずしも深く掘り下げられていない。その点で先行研究に対するいっそうの活用と、それら研究主題に関わる書籍や資料のさらなる方法的読解への努力を促したい。

以上の欠点はあるものの、全体として論文の日本語も、読みやすくりズムもあり、生硬なところの少ない、メリハリの効いた叙述に終始しており、そして何よりも論考の対象とした下井春吉に対して、対象におぼれることなく、きわめて客観的に、冷静に論述しているところも、勇み足にならずに、論の公平を保証することになった。本論文が、資料分析の点でなお留保すべき点もあるが、下井春吉の等身大の評伝として、それなりの価値を現在の日本の学会において示すことを認めたい。



博士学位論文 内容の要旨及び審査結果の要旨（第7集）

---

平成29年6月1日発行

編集・発行 大手前大学大学院

〒662-8552 兵庫県西宮市御茶家所町6-42

TEL 0798-32-5009

---

